



TITLE:

京大広報 No. 381

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 381. 京大広報 1989, 381: 819-826

ISSUE DATE:

1989-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209296>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 381

京都大学広報委員会



赤本『福神あそび』（仮題）・林文庫（江戸時代中期の子供絵本で、伝存の珍しいもの）

—関連記事本文823ページ—

目 次

<大学の動き>

次期総長に西島安則現総長を再選…………… 820

京都大学市民講座

「はな」講演要旨（その2）…………… 820

名誉教授称号授与式…………… 822

宇治地区の年末特別消防訓練…………… 823

<紹介>

教養部文学教室…………… 823

<計報>…………… 824

<随想>

アルミサッシ

名誉教授 石崎 潑雄………… 825

<コラム>

毒と薬

薬学部教授 瀬崎 仁………… 826

写真集企画委員会からのお願い………… 826

＜大学の動き＞

次期総長に西島安則現総長を再選

現総長の任期満了（12月15日）に伴う次期総長候補者の選考が11月19日（日）開催の臨時評議会において行われ、その結果、西島安則現総長が再選された。

総長候補者の選考は、選挙資格者による選挙の結果に基づいて評議会で行われる。今回の選挙は11月13日（月）から11月18日（土）までの郵便による投票と、11月18日、19日の両日にわたる各部局における投票によって行われた。開票は、評議会で選出された評議員8名の立会いのもとに行われた。

なお、今回の選挙では、第1次投票に対する選挙資格者は2,556名であり、第2次投票以降では1,505名であった。

1 第1次投票

第1次投票における投票者数は郵便による投票者数85名を含め、1,412名であった。

この投票は、2名連記で、投票総数2,824票、うち有効投票数は2,603票、無効投票数は221票であり、次の15名が第1次総長候補者に選ばれた。

赤 井 浩 一	神 野 博
朝 尾 直 弘	高 浪 満
井 村 裕 夫	得 丸 英 勝
岩 井 保	西 島 安 則
加 藤 幹 太	新 田 博 衛
河 合 隼 雄	日 高 敏 隆
川 又 良 也	深 海 浩
北 川 善 太 郎	(五十音順)

2 第2次投票

第2次投票は、第1次総長候補者15名に対して、単記により行われた。投票総数858票、うち有効投票数は856票、無効投票数は2票であり、次の3名が第2次総長候補者に選ばれた。

西 島 安 則
井 村 裕 夫
朝 尾 直 弘
(得票順)

3 第3次投票

第3次投票は、第2次総長候補者3名に対し

て、単記により行われ、投票総数852票、うち有効投票数は852票、無効投票数は0票であり、各候補者の得票数は、次のとおりであった。

西 島 安 則	707票
井 村 裕 夫	79票
朝 尾 直 弘	66票

この結果、西島安則現総長が得票過半数を得て第3次総長候補者に選ばれた。

4 選 考

臨時評議会は、選挙の結果に基づき、次期総長候補者として西島安則現総長を選考し、同氏はこれを受諾した。

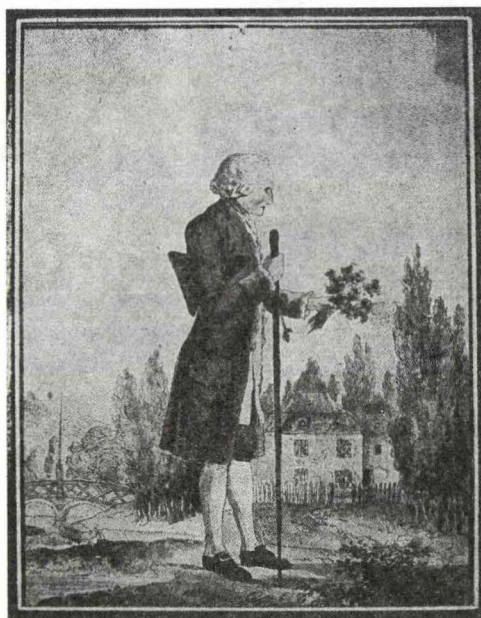
京都大学市民講座「はな」講演要旨（その2）

フランス文学のなかの花

——ルソーの場合——

文学部教授 中 川 久 定

フランス文学に登場してくる無数の花に思いをめぐらす時、どうしても見逃すことのできない名前がある。ジャン＝ジャック・ルソーである。幼年時代から花の魅力にとりつかれていた彼は、さまざまな花について、その作品のなかに書きとめ



植物採集にふける晩年のルソー（ルソー・アルバム集ガリマール社、1976年より）

ている。だがルソーは、ただ単に花に愛着する文学者であっただけでなく、また同時に専門家の域にまで達する程の植物学者でもあった。事実彼は、『「ドレセル夫人あての」植物学についての手紙』、『植物用語辞典』(断片)、『植物学』(断片)などを書き残している。

なぜルソーは、これ程までに花を愛したのだろうか。彼によれば、花はそれだけで完結した存在、「色と香りと形とをひとつに集めている有機体」(『植物用語辞典』、項目「花」)であった。だから彼にとって、花を眺めることの意味はまず、人生を幸福にすることにあった。『孤独な散歩者の夢想』(「第七の散歩」)のなかで、ルソーはこう書いている。「ぶらぶらと歩き回り、好き勝手にひとつの対象から別の対象へと関心移してゆき、興味と好奇心をもって花のひとつひとつを調べてみる・・・・・・こういう閑人(ひまじん)の仕事には、情念が完全に平静な時にしか感じられない魅力、しかもその場合、それだけで人生を幸福で快適なものにさせる魅力がある」と。

だが、数ある花の種類の中で、ルソーにとって特別な意味をもつものがひとつあった。ツルニチニチ草の花である。24歳の彼が、年上の愛人ヴァランス夫人とレ・シャルメット(フランス、グルノーブル北東の町シャンペリのすぐ近くの村)の別荘に泊まりに行った日、その途中で夫人が生垣のなかに点在する青いものに目をとめ、「あら、ツルニチニチ草がまだ咲いているわ」と叫んだ、

その花である。この小さな青い花を目にしさえすれば、いつ、どんな時でも、ルソーの内部に、ヴァランス夫人とともにレ・シャルメットの一軒家で過ごした「生涯で東の間の幸福な時」の思い出が現前してきて、「永遠に失われてしまった希望」の埋め合わせをしてくれるのであった。ツルニチニチ草の花は、幸福な内面的回想の世界へとルソーを導く、鍵の役割を果たしている。

晩年のルソーは、全ヨーロッパ的ルソー迫害同盟が組織されていて、自分はそれに追いつめられ、苦しめられている、という不幸な想念にさいなまれていた。この時期の彼にとって花を見ることは、このつらい、不安な思いから自らを解放するための、半ば無意識的、半ば意識的な精神療法であった。ルソーの死の3年後、雑誌『文学通信』(1780年7月号)は、こう書いている。「不幸なルソーが、誰にもまして自分自身の荒れ狂う想像力に警戒心を抱いていたことは確かな事実らしい。晩年の彼は、燃え立つ想像力の火を消すことだけに専念していたように思われる。彼の友人の話によれば、ルソーが植物学の研究に没頭していたのは、もっぱらこういう目的のためだった、という」と。

幸福な時も、不幸な時も、その生涯の全体が、これ程密接に、内面から花と結びついていたひとは、文学史・思想史のなかで恐らくルソーただひとりであったように思われる。

(ながかわ ひさやす)

—エレクトロニクスの華—

「発光デバイス」

工学部教授 松 波 弘 之

自然の“花”は、その色で人々の目を楽しませてくれる。花の色はその匂いとともに、動物や昆虫にもある種の信号を送っているのであろう。人為的につくろうとしても無理な色をもつ美しい花もある。さて、“色”は光のもとで初めて目に見える。また、光で各種の色が合成できる。つまり、“色”と“光”は切っても切れない密接な関係をもっている。光には自然の光(太陽光)のほかに、人工の光があり、後者は現代では無くてはならないものとなっている。人工の光は“工学”のたま

もので、工学が人類に便利さ、ひいては、文明を与えてきたといっても過言ではない。しかし、人類の欲求には果てがなく、便利さに加えて、人間の感性に訴えるものが強く望まれるようになってきている。今後の工学には人間の感性との接点が強く要求されるであろう。講演では、工学がつくる光、すなわち、“発光”を取り上げ、人間の感性と密接に関係する五感のひとつである視覚と接点をもたせながら、現代工学の一端(エレクトロニクス)を紹介し、今後の工学の採るべき一指针とした。

現代文明はエレクトロニクス抜きには考えられない。好むと好まざるにかかわらずそれを使用し、場合によっては使用させられている。多くの

場合、情報のやりとりに使われるが、必ず人と機械の接点（マン・マシン・インタフェース）がある。エレクトロニクスは、コンピュータのように情報処理のほか、いろいろな信号の表示や像（画）など情報の提示に活躍している。このなかで光が果たす役割は非常に大きく、人間の感性に近いところにある。

光は電磁波、または粒子が、エネルギーを放出するときに発生する。物質が発光するメカニズムにはいろいろあるが、特に、電子が関与する発光現象の中からルミネセンス（蛍光）を取り上げ、原理と応用を紹介した。光の波長は広い範囲にわたっているが、人間生活と密接に関係があるのは可視域（波長 400~700 nm）である。

日常生活で有用な蛍光灯（ガス中での放電による電子の励起で蛍光物質を刺激するもの）や、テレビ受像機やワープロの画面表示でなじみのあるブラウン管（真空中で電子を蛍光物質にぶつけて刺激するもの）における発光原理を簡単に説明した。

固体（結晶）内の電子の挙動が関与するルミネセンスは種々知られているが、日常生活に広範囲に利用されているものに“発光ダイオード”と“半導体レーザー”がある。発光ダイオードは、赤、橙、黄、緑の4種が市販品として入手でき、従来の白熱型豆ランプの代わりの点光源としてオーディオやビデオ機器のインディケータに広く使用され、また駅構内や空港の表示板、交通信号や警告灯などに活用されている（いくつかの実例をスライドで紹介した）。発光の原理は、半導体素子のpn接合（不純物を添加して性質を変えたものを接合したもの）に直流電流を流すことにより、電子のもっているエネルギーを光として放出する電気→光のエネルギー変換である。可視域で未開発の波長域は青色で、多くの研究者がその開発に精力を注いでいる（講演者の研究成果も含めて現状



発光ダイオード表示の例—列車行先案内—

（先発：赤，次発：橙，新快速：赤，
快速：橙，その他は全て黄緑色）

の努力を紹介した）。青色の実現は、赤、緑、青の光の三要素を形成し、合わせて白色をつくることにつながり、半導体によるフルカラー表示の夢が達成される。

これを進展させ、位相のそろった（コヒーレント：干渉できるの意）光を取り出せるようにしたものがレーザー光であり、光ファイバ通信の光源や、CD（コンパクト・ディスク）のピック・アップ用光源として使われている。いずれも動作原理と応用を説明した。

話の主筋は、光る原理と目に見えるしくみに始まり、発光のメカニズムを述べた後、発光ダイオード、半導体レーザーの原理、応用や将来の展望を紹介した。日常生活で目のあたりにしていてもそれとは気がつかない半導体の有難みを論じ、工学と人間の感性の接点を見いだす努力を紹介した。

（まつなみ ひろゆき）

名誉教授称号授与式

10月31日（火）午前10時から、総長室において工学部長出席のもとに名誉教授称号授与式が挙

され、岐美 格元教授（工学部）に称号が授与された。

宇治地区の年末特別消防訓練

本学宇治地区には学内の万一の火災事故に備えて、自衛消防団が組織されているが、恒例の年末特別消防訓練が宇治地区各部局の自衛消防隊及び宇治地区自衛消防団合同により11月27日（月）に実施された。当日は原子エネルギー研究所4階E-425号室から出火したものと想定し、通報・連絡・初期消火・避難・救出・物品搬出等、一連の総合訓練を行い自衛消防団の消防車による放水訓練のほか宇治市消防署からも消防車、ハシゴ車、救急車等が出動した。

上記のほか、各研究所・センター等からそれぞれ3～5名の教職員によって消火器による消火訓練並びに水圧検査を兼ねたクス玉割りを催した。

なお、訓練終了後、自衛消防団員によって、構内屋外消火栓の点検を行った。教職員、学生諸君には、日頃から火災予防に協力願っているが、なお一層の認識と理解を深めていただくようお願いしたい。

（宇治地区自衛消防団）



宇治地区の年末特別消防訓練（消火器による消火訓練）

＜紹介＞

教養部・文学教室

本教室の存在する根拠は、「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」の別表に定めるところにより、京都大学教養部に、学科目としての「文学」が置かれているためである。文学教室の発足は、昭和24年、旧制第三高等学校を母胎として京都大学分校が設置せられた時に、16の教室が編成せられたのであるが、国語・国文学担当の教官2名が、学科目名文学の名を称した文学教室に所属することとされたことを起原とする。爾来本教室の構成員は、国語学及び国文学の専攻者（現在4名）を以てする。「文学」の字義に則すれば、東西諸国の文学の専門家を以て充すべきものの如くであるが、学科目表には国語関係のものは存在しないから、その場合は教養部に国語担当者の所在がなくなるのである。現在、文芸理論や諸外国の文学を内容とする授業は、諸外国語教室の協力の下に実施せられており、それが最も現実的なやり方であると考えられる。

本教室に過去及び現在在籍の教官計7名の中、国文学専攻者2名に対し、国語学専攻者5名であ

るという国語学優位は、世の大学の常識を超えた比率である。しかもそれらの人々の研究領域の多くが、期せずして、文法論・表現論の方面に集中し、この分野での先駆的業績を多数生産して来たことは、本教室の一大特色と目すべきものである。

専門の性質上、本教室は特別の施設・器機等とは縁が無く、比叡山・如意ヶ嶽の絶佳の眺望と図書があるのみである。蔵書中に、林文庫と澤瀉文庫の両コレクションを含む。林文庫は第三高等学校教授 林 森太郎氏の旧蔵書で、昭和15年4月、林 森太郎先生記念会より第三高等学校に寄贈せられたもので、本教室において保管している。80部294冊の江戸時代刊本より成る。国文学関係の領域で、つとめて保存状態良好の美本が蒐集せられている。中に、赤本（仮題）『福神あそび』（柱刻「こほう」）1冊（表紙写真）、羽川珍重画作。黒本『男鳴神』（柱刻による）3冊、画は鳥居清満風。黒本・青本『せいめい歌占』（柱刻による）、二十五丁改装1冊、富川房信画、咄本『はなしとり』原小本3冊改装1冊、等の稀観書を含む。澤瀉文庫は、当時文学部名誉教授であられた澤瀉久孝博士の蒐集せられし明治時代の刊行物を、昭和32年10月本教室が一括購入したもの。図書約430

冊と外に、團々珍聞・大阪滑稽新聞がある。本コレクションは、雑多な小冊子を含む故に却って明治文化考究の好資料である。團々珍聞は、明治10年10月20日発行の31号より、明治38年3月7日発行の1528号までの範囲で510余号分を、大阪滑稽新聞は、明治41年11月3日発行の第1号より大正2年8月15日発行の114号までの範囲で61号分を存する。

これらのコレクションの外に、教室に於て収集せられた和古書には抄物資料が多く、天文23年書写の『醫方大成抄』、曹洞宗の僧洞谷の撰『古今全抄』の永禄11年転写本、僧某の語録を抄したものの一部と考えられる中世末期写本『語録カナ抄』（仮題）、浄土宗の僧円応の講義を聞書きした『妙統大師語録』の寛永13年転写本などの写本、『卮言抄』（元和6年刊）、『臨濟語録抄』（寛永9年刊）、『局方發揮』（寛永20年刊）、『無門関私鈔』（慶安3年刊）などの古刊本を蔵する。時代と共に和古書の価格は高騰し、且つ現在では、カタログ掲載の古書は寸刻を争う争奪的状况に立ち至ったから、教室に於いての購入はなし難く、近年の教室予算は、多量に生産せられる現代の研究書・翻刻資料・工具書の類を追跡するのに手一杯の有様である。

（教養部）



訃 報

田 杉 競 名誉教授

本学名誉教授 田 杉 競 先生は、11月13日逝去された。享年81。

先生は、昭和7年京都帝国大学経済学部を卒業後、本学助手、講師、助教授を経て、昭和24年経済学部教授に就任、同47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。この間、33年1月から34年1月まで経済学部長、37年6月から39年6月まで附属図書館商議会商議員を歴任され大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、京都学園大学教授（教学部長、学長）、七尾短期大学教授を歴任された。

先生の専門は経営学で、中でも戦前には中小企業論、戦後は人間関係論、経営組織論において数多くの優れた先駆的研究業績を残された。主な著書に『下請制工業論』、『人間関係』、『現代経営学総論』、『経営行動科学論』等がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和55年勲二等瑞宝章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（経済学部）

濱 田 裕 邦 文部事務官

文部事務官 濱 田 裕 邦 氏は、さる11月14日逝去された。享年33。

同氏は、昭和57年本学原子エネルギー研究所に就職され、以後経理事務に従事し、とくに通信関係に精通し、宇治地区電話回線の運用に関する事務、及び電子計算機の導入に関する諸業務において卓越した手腕を発揮された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（原子エネルギー研究所）

